

2025 山の足跡29 すごろくみたいな山リレー

山急山／稻村山 (2025/12/28)

L : M浦、H口

先日、恩賀高岩の岩峰に登った時、赤城山の手前にカップケーキみたいな形の山が見えた。周りの山とは明らかに違って目を引きつける。これは登ってみたいと思った。それが山急山だ。

そのチャンスは早々に巡って来た。あややから今年の山行納めに西上州にでも行かないかとお誘いが入ったのだ。候補の中に山急山も入っていた。これはお導きだろう。ただし山急山だけだと3時間ほどで終わってしまうので、近くにある稻村山へも足を伸ばしダブルヘッダーとすることにした。

第一試合：山急山

碓氷峠のバイパスが上信越道の立体に差し掛かる手前を右折して林道に入る。少し走って立体をくぐった先が駐車スペースであった。上方から上信越道を走る車の音が聞こえていた。準備をして7:55出発。5分ほどで登山口に至り山の中へ入って行く。

登山口から10分ほど歩いた辺りから左方の尾根に取り付いた。尾根筋はのっけから急な上りである。そしてそれが同じ調子で延々と続いている。山が急な山だから山急山なのだろうかと頭によぎる。地面は細かい軽石に覆われ足場のグリップが気になる。アキレス腱が文句を言い出ししふくらはぎもそれに同調してきた。唯一、浅間山の真っ白な頭が見えてきたのが心の救いだ。

傾斜が一段落した所で一本取った。ゆっくり上って来たにもかかわらず30分弱で240mも上がって来たのだから傾斜のほどがわかるだろうか。葉を落とした細い枝の向こうに妙義山がちょうど逆光になって見えていた。

そこから山急山の山頂までもう標高差100mばかり。急な岩場も出てきた。クライミングの人たちが行く踏み跡もあったが、山頂は右なのでそれをあややに伝えると「ご指摘サンキュウ」と言ってきた。山急山(さんきゅうさん)に掛けたわけである。

9:05、山頂に到着。周りの木々が細い枝を伸ばしているが、枝の隙間から妙義山、浅間山、恩賀高岩を眺めた。

金棒岩を過ぎて展望のきく岩場に立つと伸びた稜線の先が切れ落ちていてそこがこれから向かう五輪岩の頭だろう。



展望のきく岩場から引き返し長いトラロープに沿って下る。斜度のある薄い踏み跡をトラバースして行くと先ほど見えた稜線に出て9:40、五輪岩に着いた。

こちらは見晴らしが良く何物にも遮られる事無く真っ白な浅間山が形良く見える。登った時には感じられなかったがここからならやはり山急山はカップケーキみたいだと間近に見える。もちろん恩賀高岩が向かいに見えていて誰か山頂に居ればお互い手を振り合いたい気分だ。恩賀高岩と山急山(五輪岩)が結びついた気持ちだった。そしてこれから上の稻村山を確かめた。

少し戻って下山路にはまた長いトラロープが据えられている。

「こんなとこ下ってくんんだ」とあややが言うように落ちるような下りになっている。狭い足場は傾き乾いていてトラロープが無いととてもじゃない。トラロープにコブが等間隔で付けられているのがありがたい。

赤テープを探しながら下って行く。ちょっとルートが分かりにくい所で僕が「アカテあった！」と指を指して言うとあややが「これは？」と手を差し出した。
「えっ？」
「カワテ…、革手袋…。ちょっと無理があったかな…。」

下り続けていつの間にか往路で尾根に取り付いた所を過ぎそのまま下って行くと10:40に駐車スペースまで戻って来た。行動食を食べ一息つくとほどなく第二試合に向かって移動を始めた。

第二試合:稻村山

稻村山のコースタイムは1時間15分ほどだが、あややはそれじゃ面白くないと考え往路は登山道ではなく藪漕ぎで岩場の脇を抜け北尾根から登るルートを取ろうとしていた。しかし稻村山が見えてきて岩場が思いのほか屹立しているのを見ると「やっぱやめといた方がいいかなあ」と呟いた。
「僕はノーマルなルートで一向に構わないよ」と返事した。

赤坂橋のたもとに車を停め11:05、舗装路を歩き出した。目立たない標識の所から登山道に入ると一歩ごとに落ち葉の下の霜柱がザクザク音を立てた。
「山急山に比べてこっちは歩かれてるなあ」とあややが言うように踏み跡はわかりやすい。しかしコルから左に折れた先からはこっちもアキレス腱に負荷が掛けるような上りとなる。

途中で一本取る間もなく11:40に山頂に着いた。山頂には祠があり松が一本生えている。山頂から少し北側へ下りた所が見晴らしが良く、裏妙義が麓からせり上がるよう見えている。そして先ほどまで居た山急山の全貌が見える。歩いて来たルートを目でなぞってみた。恩賀高岩から見た山急山に登り、山急山から見た稻村山に今立っている。何かすごろくの駒になったような登山をしているようだ。さて、お次はどこへ向かおうか。



帰路は落ちるように早い。12:35、赤坂橋まで戻った。この時間ならまだどこかで美味しいものでも食べられそうだ。一山越えねばならないけれど下仁田の行ってみたかったお店に向けて一目散に車を走らせた。

(H口記)